

# 公開シンポジウム

## ここまで分かった水生動物行動の謎

日時: 2013年9月29日(日) 13:30~18:20

会場: 日本学術会議講堂 東京都港区六本木7-22-34 電話 03-3403-3793(代表)  
東京メトロ千代田線「乃木坂」駅5出口

主催: 日本学術会議 行動生物学・海洋生物学・水産学分科会

後援: 日本バイオリギング研究会・JST復興促進センター

**当日受付・入場無料**

開催趣旨: 四面を海に囲まれた我国では、謎に満ちた水生動物の行動に関する様々な研究が盛んに行われており、最新の電子機器を用いた周到な研究により、世界初の知見が数多く報告されている。本シンポジウムでは、頭足類・鳥類・哺乳類の索餌行動、および魚類の回遊行動に関する最新の研究成果を発表するとともに、水生動物行動研究の将来展望について総合討論する。



### ダイオウイカ: トワイライトゾーンの摂餌戦略

窪寺 恒己: 国立科学博物館標本資料センター

2012年、小笠原父島沖で最新鋭の有人潜水調査艇や特殊撮影機材をもちいた国際プロジェクトを通じて明らかにされた、ダイオウイカのすむトワイライトゾーンにおける特有の摂餌行動と戦略を紹介する。



### 海鳥類の採餌戦略

依田 憲: 名古屋大学大学院環境学研究科

日本沿岸の島々で繁殖するウミネコ、オオミズナギドリ、カツオドリにGPSやビデオカメラなどのデータロガーを装着して行動を記録すると同時に、生理・分子生物学的アプローチを用いて海鳥の採餌戦略を解明している。



### イルカの音響探査行動

赤松 友成: (独)水産総合研究センター水産工学研究所

イルカは、超音波を発し反射音を聞いて対象を認知する能力をもっている。効果的な危険回避と摂餌のため、イルカは十分な事前前方確認を行うと同時に、探索範囲を拡げるスキヤニングも併用していること明らかになってきた。



### クロマグロの回遊・行動生態はどこまで分かったか

北川 貴士: 東京大学大気海洋研究所

バイオリギング計測技術の進展により、近年明らかになってきたクロマグロの回遊・行動生態の実態について簡単に紹介する。また、高度回遊性魚類の回遊・行動計測技術に関する課題についても言及したい。



### サケの嗅覚による母川記銘・回帰行動

上田 宏: 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

サケ稚魚が母川のニオイを記銘して降海し、ベーリング海にて索餌回遊により成長し、親魚が母川のニオイを想起して回帰する謎の行動を、動物行動学、生殖内分泌学、および感覚神経生理学的手法を用いて解明している。



### ウナギの回遊行動の起源と進化

塚本 勝巳: 日本大学生物資源学部

40年に及ぶ海洋調査の結果、2009年ウナギ卵が発見された。日本から3000km南の西マリアナ海嶺南部海域であった。ウナギの大回遊は、熱帯外洋中深層の深海魚を起源する一匹の稚魚が河口沿岸域に漂着し、そこを追われて偶然河川遡上したことから始まった。



# プログラム

- (司会)岡ノ谷 一夫(日本学術会議連携会員、東京大学大学院  
総合文化研究科)
- 13:30 開会の挨拶 渡邊 茂(日本学術会議連携会員、行動生  
物学分科会委員長、慶應義塾大学文学部)
- 13:40 ダイオウイカ:トワイライトゾーンの摂餌戦略  
窪寺 恒己(国立科学博物館標本資料センター)
- 14:10 海鳥類の採餌戦略  
依田 憲(名古屋大学大学院環境学研究科)
- 14:40 イルカの音響探査行動  
赤松 友成((独)水産総合研究センター水産工学研究  
所)
- 15:10-15:30 休憩
- 15:30 クロマグロの回遊・行動生態はどこまで分かったか  
北川 貴士(東京大学大気海洋研究所)
- 16:00 サケの嗅覚による母川記銘・回帰行動  
上田 宏(日本学術会議連携会員、北海道大学北方  
生物圏フィールド科学センター)
- 16:30 ウナギの回遊行動の起源と進化  
塚本 勝巳(日本大学生物資源学部)
- 17:00-17:10 休憩
- 17:10 総合討論  
(コメンテーター)  
桑村 哲生(日本学術会議連携会員、中京大学国際教  
養学部)  
辻 和希(日本学術会議連携会員、琉球大学農学部)  
友永 雅己(日本学術会議連携会員、京都大学霊長類  
研究所)  
仁平 義明(日本学術会議連携会員、白鷗大学教育学  
部)
- 18:10 閉会の挨拶 長谷川 寿一(日本学術会議第一部会員、  
東京大学理事・副学長)
- 18:20 閉会